

〔原著〕

大学生におけるソーシャル・スキルと過剰適応傾向との関連

筑波大学大学院人間総合科学研究科：臼倉 瞳

早稲田大学教育総合科学学術院：堀 正士

筑波大学人間系：濱口 佳和

The relationship between social skills and
the tendency of over-adaptation among university students

Hitomi Usukura, Masashi Hori and Yoshikazu Hamaguchi

問題と目的

思春期・青年期における不登校や自殺、「キレる」現象など様々な心の問題を呈する子どもの中には、幼い頃から適応的な子どもと周囲に思われていた子どもも含まれる（河合，1996）。周囲の期待に沿うよう努力し、自分の欲求を過度に抑えた結果、「よい子の息切れ型」としての不登校に至る例も報告されている（庄司・林田，2003）。さらには、昨今ではいわゆる「よい子」と称されるような心性を持った子どもが重大犯罪を引き起こすような事例の増加傾向が顕著になっている（須永，2008）。

「よい子」あるいは「いい子」という言葉で表される子ども像として、羽田（1992）は「なんでもよくやる真面目な子ども」や「大人の望んでいることに敏感で迷惑をかけないように常に先回りをして振る舞う子ども」などを挙げている。このように周囲の期待に沿うように常に気がねをして自分自身の自由な感情を抑えるという特徴は「過剰適応（over-adaptation）」という言葉に要約できると考えられている（桑山，2003）。そもそも適応とは、個人の心的状態の安定を意味する内的適応と、社会的・文化的環境への適応を意味する外的適応のバランスがとれた状態にあることを意味する（北村，1965）。一方、過剰適応は周囲の期待に応えるために内的欲求や感情を抑制することで高い外的適応を維持しており、内的適応と外的適応のバランス

が崩れた状態にある（桑山，2003）。このように内的適応を犠牲にしてまで外的適応を達成しようとする姿勢からは、何らかの心理的葛藤や多大なストレスを内面に抱えている可能性が考えられ（大嶽・五十嵐，2005）、過剰適応は適応方略の1つでありながら不適応行動として捉えられている。

しかし、過剰適応傾向を持つ者はその外的適応の良さによって問題が顕在化しづらいことが予想され、杉原（2001）も、過剰適応的と呼ぶことがふさわしい青年が、適応的と見られている青年の中の一群を形成していることを示唆している。また、先行研究では内的不適応を抱えているにもかかわらず外的適応を実現しようと努力している過剰適応者の行動特徴として、対人関係についてのスキルであるソーシャル・スキルが取り上げられている。福光・河村（2009）は、過剰適応は自ら積極的に他者と関わることは少ないが、配慮のスキルを用いて集団には適応していることを明らかにしており、庄司・林田（2003）は、「いい子」傾向が高い者ほど他者に共感・同調するような行動をとることを指摘している。鈴木・小川（2007）は、被受容感が高いが自尊心は低い群が過剰適応的な心性を持っていることを指摘した上で、そのような群はソーシャル・スキルの「向社会的行動」と「主張的行動」の得点が高く、適切なソーシャル・スキルを身につけていると自己認知していることを明らかにした。

これらの先行研究から、過剰適応傾向を持つ者は、「よい子」傾向の測定法によっても異なるが、配慮や共感といった向社会的スキルの高さという点で共通性がみられる。こうした先行研究の結果は、一般に適応的と考えられている高いソーシャル・スキルを持つ群の中に、必ずしも適応的とは言いきれない過剰適応傾向の高い者が含まれている可能性を示唆するものである。これは、ソーシャル・スキルを発揮し、適応的に見える人々の中にも、人知れず内的葛藤を抱え、苦しんでいる人々がいることを意味している。こうした人々を特定し、適切な予防的対応を行うことは、臨床的に重要な課題と思われる。そこで、本研究では過剰適応傾向とソーシャル・スキルの高さの組み合わせによって調査対象者を分類した上で、特に過剰適応傾向とソーシャル・スキルの両方が高い群に注目する。つまり、高いソーシャル・スキルを持つ者の中には過剰適応傾向の低い者よりも高い者の方が多くいることが予想され、さらにこの両要因が高い群は他の組み合わせの群と比較して最もソーシャル・スキルが高いことが予想される。したがって、本研究では、(1) ソーシャル・スキル高群において、過剰適応傾向の低い者は有意に少なく、過剰適応傾向の高い者は有意に多い、(2) ソーシャル・スキル高群の中でも、過剰適応傾向の高い者のソーシャル・スキルは、過剰適応傾向が高くない者よりも高い、という2つの仮説を検証することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

都内の私立大学の学生160名(男性94名, 女性66名)に質問紙調査を実施した。年齢無記入であった1名を除き, 平均年齢は20.18歳, 標準偏差は1.62であった。

2. 調査時期

2010年7月上旬に調査を実施した。

3. 質問紙の構成

1) フェイス・シート

学部, 学科, 学年, 年齢, 性別を尋ねた。

2) 過剰適応尺度

桑山(2003)による過剰適応尺度を用いた。「対自因子」12項目と「対他因子」10項目の2因子, 計22項目からなる。「いつもそうだ」, 「たいていそうだ」, 「どちらともいえない」, 「たいていそうでない」, 「いつもそうでない」の5件法で尋ねた。

3) KiSS-18

ソーシャル・スキル尺度として菊池(1988)の作成したKiSS-18を用いた。18項目からなる。「いつもそうだ」, 「たいていそうだ」, 「どちらともいえない」, 「たいていそうでない」, 「いつもそうでない」の5件法で尋ねた。

4. 調査手続き

授業後の時間を利用して集団で実施された。回答は全て無記名で行われた。

結 果

1. 尺度の信頼性係数の確認

1) 過剰適応尺度

桑山(2003)の因子分析結果(Table 1)に基づき, 下位尺度の得点を算出した。信頼性係数を算出したところ, 「対自因子」は $\alpha = .84$, 「対他因子」は $\alpha = .74$ であった。

2) KiSS-18

楠奥(2009)の因子分析結果(Table 2)に従って, 下位尺度の得点を算出した。

第1因子は他者との会話における積極性に関する項目で構成されており, 「積極的な会話スキル」と命名されている。第2因子は楠奥(2009)では「自己統制スキル」と命名されていたが, 直面した問題の解決に関する因子と解釈するのが妥当と考えられたため, 本研究ではこれ以降「問題解決スキル」と呼ぶことにする。第3因子は楠奥(2009)では「ストレスマネジメントスキル」とされていたが, 対人間でのトラブルの解決に関するスキルと解釈するのが妥当と考え

Table 1 桑山（2003）の過剰適応尺度の項目

項目内容
I. 対自因子
1. 間違っことをしたり、言ったりするのが恐くて、引っ込み思案になる
2. 自分の言っことや、しっことに自信がない
3. 不当な要求をされるとき、「いやです」と断れない
4. いっも自分の考えや意見を持っている*
5. 周りの人たちの評価が気になっ、自分のしっように行動できない
6. 他人の反対にあうと自分の意見を変えてしっう
7. 他人の顔色をうかがってしっう
8. 自分が本当はしっしたいのか、よく分からないことがある
9. 自分がしっしたいのかというこは、いっでもはっきりしっている*
10. 他人とのどんなトラブルも避けるように、いっも気を配っている
11. 不愉快なこでも無理にがまんしってしっう
12. 自分が悪かったのではないかと後悔するこが多い
II. 対他因子
13. 親や先生の期待にはできるだけ応えるように努力する
14. 親の言いつけはほとんど守っている
15. たいていの規則には従っている
16. 周囲に迷惑をかけないようにいっも気を配っている
17. 自分がしっ感じているかに関係なく、目上の人言うこはきく
18. 両親の期待にそっているかどうかを気にかけっている
19. 自分がしっしたいかよりも、しっすべきかの方が先に思っ浮かぶ
20. いっも褒められたいと思っている
21. 目上の人に指図されて何かをする時でも、反感を感じるこはほとんどない
22. 大人の意見をきかず、自分の考えに従って行動する*

*は逆転項目。

Table 2 楠奥（2009）による因子分析結果に基づく KiSS-18（菊池，1988）の項目

項目内容
I. 積極的な会話スキル
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
1. 他人と話して、あまり会話が途切れないほうですか。
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
II. 問題解決スキル
12. 仕事上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか。
9. 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。
17. まわりの人たちが自分と違っ考えを持っいても、うまくやっていけますか。
14. あちこちから矛盾した話が伝わっても、うまく処理できますか。
16. 何か失敗しっるとき、すぐに謝ることができますか。
III. 対人葛藤処理スキル
8. 気まずいこがあっ相手と、上手に和解できますか。
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
11. 相手から非難されしっときにも、それをうまく片付けられますか。
IV. 他者とのかわりスキル
3. 他人を助けるこを、上手にやれますか。
2. 他人にやってもらいたいこを、うまく指示することができますか。

られたため「対人葛藤処理スキル」と呼び方を改めた。第4因子は楠奥（2009）では「マネジメントスキル」とされていたが、他者への援助や指示の効果的な実行に関するスキルと解釈できるため「他者とのかかわりスキル」と呼び方を改めた。

信頼性係数を算出したところ、「積極的な会話スキル」は $\alpha = .76$ 、「問題解決スキル」は $\alpha = .62$ 、「対人葛藤処理スキル」は $\alpha = .70$ 、「他者とのかかわりスキル」は $\alpha = .76$ であった。

2. 各変数の記述統計量と性差の検討

過剰適応尺度とKiSS-18の男女別および全体の平均値とSDを求めた（Table 3）。さらに男女差の検討を行うために各尺度の下位尺度得点に対して t 検定を行った。

過剰適応尺度の下位尺度得点は、各項目得点の合計値を利用して算出した。 t 検定を実施した結果、過剰適応尺度合計得点（ $t(158) = 0.33$, $n.s.$ ）、「対自因子」（ $t(158) = 1.16$, $n.s.$ ）、「対他因子」（ $t(158) = 1.04$, $n.s.$ ）のいずれも男女の得点差は有意ではなかった。

KiSS-18の下位尺度得点は、下位尺度ごとに項目数のばらつきが見られたため項目平均値を下位尺度得点として利用した。 t 検定を実施した結果、KiSS-18の合計得点（ $t(158) = 1.12$, $n.s.$ ）、「積極的な会話スキル」（ $t(158) = 1.47$, $n.s.$ ）、「問題解決スキル」（ $t(158) = 0.40$, $n.s.$ ）、「対人葛藤処理スキル」（ $t(158) = 1.70$, $n.s.$ ）、「他者とのか

かわりスキル」（ $t(158) = 0.63$, $n.s.$ ）のいずれも男女の得点差は有意ではなかった。

3. 過剰適応とソーシャル・スキルの水準の組み合わせによって抽出される各群の所属人数とその特徴

1) 群分けの手続き

調査対象者を過剰適応傾向によって3群に、ソーシャル・スキルの高さによって2群にそれぞれ分類する手続きを行った。

過剰適応傾向による分類は、藤村（2007）にない、尺度の平均値+1SD以上の群（尺度合計得点が79.68以上）を高群、尺度の平均値+1SDから-1SDまでに含まれる群（尺度合計得点が59.65～79.67の範囲）を平均群、尺度の平均値-1SD以下の群（尺度合計得点が59.64以下）を低群とした。

また、各回答者のソーシャル・スキル得点を算出した結果、平均値は59.77点、中央値は60点、標準偏差は0.79、最小値は33点、最大値は85点であった。そこで分布の正規性を確認した後、谷村・渡辺（2008）に従い、中央値を境にしてソーシャル・スキル得点が高い群（61点以上）と低い群（59点以下）の2群に回答者を分類した。その結果、中央値（60点）の7名が除外され、ソーシャル・スキル高群（ $M = 67.89$, $SD = 5.95$ ）は76名、ソーシャル・スキル低群（ $M = 51.73$, $SD = 6.39$ ）は77名、計153名となった。

Table 3 各尺度の男女別・全体の平均値とSD

	全体 ($n = 160$)		男性 ($n = 94$)		女性 ($n = 66$)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
過剰適応						
合計得点	69.66	10.02	69.88	9.73	69.35	10.48
対自因子	36.26	7.38	36.83	7.34	35.45	7.42
対他因子	33.40	5.02	33.05	4.65	33.89	5.51
KiSS-18						
合計得点	59.77	9.96	59.03	9.79	60.82	10.17
積極的な会話スキル	3.16	0.81	3.08	0.79	3.27	0.82
問題解決スキル	3.57	0.54	3.58	0.52	3.55	0.59
対人葛藤処理スキル	3.18	0.65	3.11	0.66	3.28	0.63
他者とのかかわりスキル	3.34	0.82	3.30	0.85	3.39	0.77

2) 群分けの妥当性の検討

上記の群分けが妥当に行われたかを検討するために、各尺度の平均値について群間で有意差が見られるかどうかを確認した。

過剰適応3群に対して一元配置分散分析を行った結果、群間の得点差は有意であった ($F(2,150) = 229.20, p < .001$)。Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、低群、平均群、高群の順で有意に得点が高くなっていたため、過剰適応傾向に基づく3水準の群分けは、十分な妥当性を持って行われたと考えられる。

また、ソーシャル・スキル2群に対して t 検定を行った結果、高群の方が低群よりも有意に得点が高かった ($t(151) = 16.19, p < .001$)。したがって、ソーシャル・スキル得点に基づく2水準の群分けも十分な妥当性を持って行われたと言えよう。

3) 各群の特徴

上記の手続きに基づく回答者の分類結果をクロス集計表にまとめた (Table 4)。分類の結果、HL 群 (ソーシャル・スキルが高く過剰適応傾向は低い)、HM 群 (ソーシャル・スキルが高く過剰適応傾向は平均レベル)、HH 群 (ソーシャル・スキルも過剰適応傾向も高い)、LL 群 (ソーシャル・スキルも過剰適応傾向も低い)、LM 群 (ソーシャル・スキルが低く過剰適応傾向は平均レベル)、LH 群 (ソーシャル・スキルが低く過剰適応傾向は高い) の6つの群が出来上がった (各群の表記における2つの英字は、左側がソーシャル・スキルの水準、右側が過剰

適応傾向の水準を表す)。なお、それぞれの群の男女内訳は、HL 群 ($M = 8, F = 9$)、HM 群 ($M = 29, F = 20$)、HH 群 ($M = 6, F = 4$)、LL 群 ($M = 3, F = 2$)、LM 群 ($M = 34, F = 22$)、LH 群 ($M = 10, F = 6$)、であった。

χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2 = 8.39, df = 2, p < .05$)。さらに、残差分析を行ったところ、HL 群は期待値よりも有意に人数が多いが、LL 群は有意に人数が少なかった。

4. ソーシャル・スキル高群3群、ソーシャル・スキル低群に対する分散分析

ソーシャル・スキル高群である HL 群、HM 群、HH 群、そしてソーシャル・スキル低群全体の4群間の差を検討するため、群を独立変数、KiSS-18の合計得点とその下位尺度を従属変数とする一元配置分散分析を行った (Table 5)。その結果、KiSS-18の合計得点 ($F(3,149) = 89.52, p < .001$)、 「積極的な会話スキル」 ($F(3,149) = 54.10, p < .001$)、 「問題解決スキル」 ($F(3,149) = 21.67, p < .001$)、 「対人葛藤処理スキル」 ($F(3,149) = 53.61, p < .001$)、 「他者とのかわりスキル」 ($F(3,149) = 38.28, p < .001$) の全てにおいて、群間の得点差は有意であった。Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、ソーシャル・スキル高群である HL 群、HM 群、HH 群の3群の方がソーシャル・スキル低群全体よりも有意に KiSS-18 の合計得点と各下位尺度得点が高かった。ただし、ソーシャル・スキル高群である HL 群、HM

Table 4 過剰適応3群とソーシャル・スキル2群の所属人数

ソーシャル・スキル	過剰適応傾向			合計
	低群	平均群	高群	
高群	17 (2.8**)	49 (-1.1)	10 (-1.3)	76
低群	5 (-2.8**)	56 (1.1)	16 (1.3)	77
合計	22	105	26	153

$\chi^2(2) = 8.39, **p < .01$

※() 内の数値は調整済みの標準化残差。

※KiSS-18の下位尺度得点の平均、SD は、各下位尺度の合計得点を項目数で除した値に基づいて算出した。

群, HH 群の3群間では得点の有意差は見られなかった。

考 察

本研究では、(1) ソーシャル・スキル高群において、過剰適応傾向の低い者は有意に少なく、過剰適応傾向の高い者は有意に多い、(2) ソーシャル・スキル高群の中でも、過剰適応傾向の高い者のソーシャル・スキルは、過剰適応傾向が高くない者よりも高い、という2つの仮説を検討した。

まず、過剰適応3群とソーシャル・スキル2群のそれぞれに属する人数を把握するためにクロス集計表を作成したところ、ソーシャル・スキル高群では過剰適応平均群に属する者の人数が49名と最も多く、次に過剰適応低群の17名が続き、過剰適応高群は10名と最も人数が少なかった。 χ^2 検定の結果、HL群で有意に多かったが、HH群では有意に多いということではなかった。したがって、「ソーシャル・スキル高群において、過剰適応傾向の低い者は有意に少なく、過剰適応傾向の高い者は有意に多い」という仮説は支持されなかった。

次に、ソーシャル・スキル高群であるHL群、HM群、HH群、そしてソーシャル・スキル低群全体の4群を独立変数、KiSS-18の合計得点とその下位尺度を従属変数とする一元配置分散分析を行った結果、ソーシャル・スキル高群の3群間での有意な得点差は見られなかった。した

がって、本研究においては「ソーシャル・スキル高群の中でも、過剰適応傾向の高い者のソーシャル・スキルは、過剰適応傾向が高くない者よりも高い」という仮説も支持されなかった。以下でこれらの仮説が支持されなかった理由を考察する。

本研究で取り上げたソーシャル・スキルの内容の偏り

先行研究では、過剰適応傾向とソーシャル・スキルの関連を示唆されてきたが(例えば、福光・河村, 2009; 庄司・林田, 2003; 鈴木・小川, 2007)、一元配置分散分析では、ソーシャル・スキル高群であるHL群、HM群、HH群の3群間でソーシャル・スキル得点の有意な群間差は見られず、特にHH群の得点はHL群と同程度であり、差が見られなかった。この理由として、本研究で取り上げたソーシャル・スキルの内容に偏りがあり、過剰適応者に特異的に高くみられるソーシャル・スキルを測定しなかったことが考えられる。本研究で用いたKiSS-18は、「積極的な会話スキル」、「問題解決スキル」、「対人葛藤処理スキル」、「他者とのかわりスキル」の4因子で構成されており、アサーティブな内容のスキルが中心となっている。これに対して、先行研究で取り上げられているような配慮や共感といった向社会的スキルは本研究では扱われていない。自己抑制的かつ他者志向的な態度で外界に適応しようと試みている過剰適応者に特異的に高くみられるであろう向社会的

Table 5 ソーシャル・スキル高群3群とソーシャル・スキル低群に対する分散分析結果

	ソーシャル・スキル高群			ソーシャル・スキル低群	F 値	多重比較結果 (5%水準)
	HL 群 (n = 17)	HM 群 (n = 49)	HH 群 (n = 10)	3 群 (n = 77)		
KiSS-18合計得点	69.35 (5.49)	66.92 (5.77)	70.20 (6.97)	51.73 (6.39)	89.52***	3, 1, 2>4
積極的な会話スキル	3.98 (0.38)	3.56 (0.63)	4.06 (0.43)	2.58 (0.59)	54.10***	3, 1, 2>4
問題解決スキル	3.84 (0.45)	3.92 (0.38)	3.75 (0.60)	3.28 (0.49)	21.67***	2, 1, 3>4
対人葛藤処理スキル	3.71 (0.32)	3.59 (0.41)	3.90 (0.59)	2.71 (0.50)	53.61***	3, 1, 2>4
他者とのかわりスキル	3.94 (0.39)	3.83 (0.60)	3.95 (0.50)	2.78 (0.70)	38.28***	3, 1, 2>4

多重比較の結果は、1: HL 群, 2: HM 群, 3: HH 群, 4: ソーシャル・スキル低群3群を示す。

() は標準偏差, *** $p < .001$.

※ KiSS-18の下位尺度得点の平均, SD は、各下位尺度の合計得点を項目数で除した値に基づいて算出した。

スキルを取り上げなかったために、本研究では HH 群と HL 群の間でソーシャル・スキルに差が見られなかったと考えられる。

過剰適応者のソーシャル・スキルの自己評価についての歪みの可能性

仮説が支持されなかった 2 つ目の理由として、過剰適応者の場合には、本来は十分なソーシャル・スキルを有しているにもかかわらずソーシャル・スキルの自己評価が低くなるということが考えられる。山田 (2010) は、KiSS-18 で測定された社会適応能力の自己評価が過剰適応群の場合には低まるという本研究と類似した結果を明らかにした。そして、ソーシャル・スキルの自己評価と他者評価の間には乖離が生じる (平賀, 2003) という可能性を指摘し、過剰適応群のソーシャル・スキル得点が低くなった理由として、過剰適応者が自分は社会に適応しているという自信や実感を持ちにくいからであると説明した。本研究では、ソーシャル・スキルは自己評価でしか測定していないため、HH 群と HL 群の間でソーシャル・スキルに差がみられなかったのかもしれない。今後は、他者評価で測定して検討する必要があるだろう。

今後の課題

本研究では、過剰適応とソーシャル・スキルとの関連を示唆する先行研究とは異なる結果が得られており、本研究で取り上げたソーシャル・スキルの内容の偏り、過剰適応者によるソーシャル・スキルの自己評価に関する妥当性の検討の必要性が考察された。

今後は、より多種多様なソーシャル・スキルを取り上げてソーシャル・スキルと過剰適応との関連を検討し、過剰適応者の用いるソーシャル・スキルの特徴をより詳細に明らかにする必要があるだろう。これにより、過剰適応がより適切な方法で外的適応を達成するために必要なソーシャル・スキルを特定し、実際にそれらのソーシャル・スキルの習得を目指した介入の効果検討などの研究が期待できるだろう。また、

過剰適応者のソーシャル・スキルの自己評価に関する妥当性を検討するために他者評価も併用し、ソーシャル・スキルの自己評価と他者評価の間の乖離について改めて検討する必要があるだろう。

引用文献

- 羽田紘一 (1992). よい子が危ない—本当の「自信」を育てるには— 児童心理, 46, 920-923.
- 平賀明子 (2003). 社会的スキル「自己報告尺度」に関する妥当性の検討—仲間からの評価と自己評価との関連— 北星学園大学短期大学部北星論集, 1, 57-70.
- 藤村和久 (2007). 児童における自律的動機づけと過剰適応との関連について—関係性の視点から— 兵庫教育大学大学院学校教育研究科学位論文 (未公開).
- 福光奈緒子・河村茂雄 (2009). 女子中学生における過剰適応とソーシャル・スキルの関連についての検討—日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 205.
- 河合 温 (1996). 大人によい印象を与えようとする子ども—「よい子」にみられる問題— 児童心理, 50, 110-114.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—川島書店
- 北村晴朗 (1965). 適応の心理—誠信書房
- 楠奥繁則 (2009). 大学生の進路選択セルフ・エフィカシー研究—KiSS-18からのアプローチ— 対人社会心理学研究, 9, 109-116.
- 桑山久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.
- 大嶽典子・五十嵐透子 (2005). 思春期における過剰適応とその関連要因—上越大学教育心理教育相談研究, 4, 151-161.
- 杉原保史 (2001). 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について—心理臨床学研究, 19, 266-277.
- 須永和宏 (2008). 「よい子」が走る非行・犯罪

- なぜ、あの子が！— 児童心理, 62, 1481-1485.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2007). 自尊心と被受容感による思春期の適応理解の検討—社会的スキルとの関連から— 筑波大学心理学研究, 34, 91-99.
- 庄司一子・林田和恵 (2003). 「いい子」傾向をもつ子どもの self-control と対人関係 教育相談研究, 41, 49-57.
- 谷村圭介・渡辺弥生 (2008). 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面で
の対人行動との関係 教育心理学研究, 56, 364-375.
- 山田有希子 (2010). 青年期における過剰適応と見捨てられ抑うつとの関連 九州大学心理学研究, 11, 165-175.